

役場の対人援助論

(2 5)

岡崎 正明

語りの効用

ねほり、はほり

「ねほりんぱほりん」というテレビ番組をご存じだろうか。

今は放送が終了しているが、これまで2シーズン放送されている。なかなか評判が良いようで、おそらくシーズン3も近いうちにあるようだ。

この番組、ひと昔前ならだれも注目しなかった深夜のNHK教育という枠の放送で、司会は南海キャンディーズの山里亮太と、タレントのYOU。毎回「元薬物中毒患者」や「宝くじ高額当選者」など、顔出しNGのゲストを呼び、一般には知られていないディープな世界の実情を語ってもらう。いわゆるシロウトさん相手のトーク番組である。

そこまで聞いて「ふーん」という感想しか抱かない人も多いだろう。ありそうな番組だと思われるかもしれない。

しかしこの番組の斬新さはここからだ。通常顔出しできない人をテレビで扱う場合、顔にモザイクを入れたり、機械処理で音声を変え、暗い部屋で足元だけしか撮らなかったり…という手法が使われる。しかしそれでは登場人物の個性が出ない。画面も味気なく、陰気な感じやシリアスな雰囲気になってしまう。

そこで活かされたのが、NHKが「ひょっこりひょうたん島」以来伝統的に得意とする“人形劇”というコンテンツ。ゲストにモザイクをかける代わりに、ブタの人形に身代わりになってもらい、司会の2人はモグラの人形に。人形の衣装も、本人の様子を反映させて個性の演出に成功。人形同士がトークをする、一見すると子どもが喜びそうなやさしくほんわかした絵面で、話の中身は超刺激的という、これまで見たことないトークバラエティとなった。

このギャップにハマった私は、毎回楽しみに観ていたのだが、その中でちょっと面白いことに気がついた。実は番組に出演した人で、その後の人生が大きく変化している例が結構見られるのだ。

例えば「偽装キラキラ女子」という回に出演した女性。それまで架空のアカウントで、都心で働く美人 OL という設定の人物を演じ（本当は関西在住）、嘘のリア充ツイートを繰り返しては「いいね！」やフォロワーが増えることで承認欲求を満たしていた。ところが出演後に番組がその後の様子を聞くと、いつの間にかツイッターを見る回数が減っていき、気がつく「他人の評価軸で生きること自体がめんどくさいな」と思うようになり、現実世界の人生に向き合うようになったという。

また「ナンパ教室に通う男」という回に出たアラフィフの男性は、それまで 3 万人以上の女性に声をかけたという強者だったが、亡くなった両親に親孝行したいとの思いもあって番組出演後に結婚を真剣に考えるように。その後知人の紹介で知り合った女性と結ばれ（ナンパじゃないんかい！）、仏壇に 2 人で結婚を報告したとのことだった。

その他にも、整形にハマる女性が顔への執着が薄くなり、「中身のいい人がかわいく見えるということが理解できるようになった」という話もあった。

これらは何を意味するのか。

出演者はそれぞれその世界にどっぷりハマっていた猛者たちである。芸能人からインタビューを受けたくらいで、その生活を変える必然性はどこにもない。別に非難されたり、反省を促されたわけでもない。なのになぜ、こんな変化が起こるのだろう。

私はこれこそ「語り」の持つ効用だと確信している。もちろん全国放送のテレビに出演したという、ドラマティックな体験が影響を与えている点もあるだろうが、それでも本質的にはあの 2 人の聴き手を相手に、自らのことを「語った」そのこと自体が、変化への大きなエネルギーになったのだと思わずにはいられない。



価値観の逆転

エッセイストの末井昭は著書「自殺」（朝日出版社）でも有名な伝説的編集者である。彼は幼少期に、自分の母親がダイナマイトで不倫相手と心中したという経験を持つ。そのことがコンプレックスで、長年誰にも打ち明けられなかったという。

ところがある時、芸術家の篠原勝之（愛称クマさんで有名）と飲んでいて、「実は母親がダイナマイトで心中しまして…」と何気なく語ったところ、「すごいね、それは！」と驚くけれど素直に面白がるような感じで受け止めてもらえ、とても救われたという。それ以来、彼はその話を抵抗なくできるようになり、母親のことも許せるような気持ちになっていったとのことだった。

「語り」とは、基本的に2人以上の人間を必要とする共同作業である。

「語り手」の準備性はもちろん、「聴き手」の受け止め方や姿勢も重要な要素となる。どちらが欠けても、その「語り」に大きな効果を生み出すことはできない。いやむしろ「語り」という名前だが、聴き手のあり方のほうが問われるものではないかとさえ思う。

山里とYOUにせよ、前出の篠原氏にせよ、共通するのは聴き手が語り手の話に純粋に興味を持っている点である。そこには「何か売りつけよう」とか「相手をどうにかしてやろう」といった変な下心も裏側もない。ただただ単純に相手の話に関心を示し、面白がって話を聴いているのである。

「ねほりんぱほりん」では司会の2人が「少年院経験者」や「元サークルクラッシャー（グループ内で複数の恋愛関係を持ち、内部の人間関係を崩壊させる人）」など、一般的にはあまり賞賛されない行為をした人々のインタビューをすることもある。

しかしそんなときも基本的に2人は、語られる内容を批判したり否定したりしないし、適当に慰めたり受け流したりもしない。もちろんテレビ的な意図もあるためだが、ただひたすらドンドンと、話を興味のある方に掘り下げるだけである。

特に進行を“ねほりん”こと山里に任せた、“ぱほりん”ことYOUは、「スゲエ」「それ分かる～」などと、ひたすら感心・驚嘆し、ゲストの語りに耳を傾けている。ときには「マジ説教な」などと突っ込むこともあるが、語尾には基本的な相手への肯定がにじんでいるのが分かる。

番組に出演した人たちにとって、こうした態度の聴き手に会うことはなかなかの衝撃だと思う。

なぜなら今までの人生において、語り手自身が「ろくでもない失敗」「他人に聞かせられないコンプレックス」と、散々な評価を下していた話が、相手から突如「貴重な体験」「ネタ＝面白い話」として、価値があるものだと評価されるのだ。この価値観の逆転は、語り手の中でその意味づけが変化するきっかけに十分なる。

べてるの家の実践で有名なソーシャルワーカーの向谷地生良氏が、「統合失調症を持つ人への援助論 人とのつながりを取り戻すために」(金剛出版)でこんな話を書いていた。

統合失調症による幻聴や妄想のため、自宅に閉じこもり、親に腹を立てては大声を出したり、物に当たったりを繰り返す20代男性がいた。両親から依頼を受けた向谷地氏が、自宅を訪問することにしたが、両親は向谷地氏が訪問することの了解を、息子からとる自信が無いという。そこで氏は「向谷地さんという人があなたに相談したいことがあるらしいよ」とだけ伝えてもらうことにした。

訪問当日、向谷地氏は玄関先で男性に「突然お邪魔してすみません。近くに来る機会があったら是非、寄ってお会いしたいと思っていました。私は今、〇君と同様の苦勞をしながら在宅でがんばっている人たちを紹介いただいて、経験を聞かせてもらいながら、その人たちの応援の仕方を学んでいます。〇君も苦勞を重ねながら、がんばっていらっしゃるといって、相談したいこともあったので…」と語りかけた。すると長年

人と会いたがらなかった男性が「僕に相談ですか？」と戸惑いながらも中に入れてくれ、話ができたという。

これまで男性にとって、自らの語りは「問題」や「症状」であり、それは「支援する立場の人」が聞く「治療」「矯正」されるべきものだった。そんな固定概念は、彼自身にも家族にも、そして私たち社会にもある。向谷地氏の「相談したい」という姿勢は、その価値観を揺さぶるものであり、おそらくねほりんたちの聴き手としての態度も、同じような効果を発揮しているのだと思われる。

蛇足だが、番組の後半にばほりんがするコメントも秀逸なことが多い。例えば「里子」の回では、出演した里子の高校生男子が「里親には感謝することばかり」とまっすぐな発言を続けた。里親からの手紙を涙ながらに読み、終始感心していた彼女だが、最後に「私が心配なのはあなたが正しすぎるってこと」「エロいこととか考えてる？」と問いかけた(笑)

率直だが愛のあふれる言葉がけ。私は彼女の聴き手としての天性のセンスと優しさを感じずにはいられなかった。

今いる場所で

私たちは人生の中で幾度となく語り手・聴き手を経験する。

家族・友人・同僚・ご近所さん・先生・恋人・お客さん。様々な人と、様々な語りをする。自分の人生にとって大事な人も、1度きりのささやかなご縁の人もいる。

話の中身もいろいろで、しょーもないことやどうでもいいことから、高尚なことまである。気持ちの上がる話もあれば、ときには気の進まないものもあるだろう。そしてごく稀にだが、人生を動かすような語りに出くわすこともある。また、そこまで劇的なことでなくとも、話しているうちに考えがまとまったり、逆に考え方が変わったり…。そんな経験した人は多いはずである。

思わぬ気づきを得る語り。新たな世界のドアを開くような語り。そういうのって実は、普段思ってもみないような意外な人とのささやかな会話だったりすることが、案外あったりするんじゃないだろうか。

役所生活も15年を超え、おかげさまでいろいろな仕事をさせてもらった。様々な分野に触れる中で、特に最近はこれまであまり話をするのが無かった組織や地域団体の方と話をする機会が増えた。

直接今の業務とは関係ないこと。これまで知らなかった地域のこと。そんな話を聞くと、以前の私ならテキトーに受け流すことが多かったように思う。しかし今では積極的に、「興味が持てる要素はないか?」「今の自分との接点はないか?」と、前のめりな姿勢を心がけるようにしている。

なぜならそのほうが面白い話が聴けることが増え、信頼関係が築ける確率が上がり、仕事が効果的に進むということが経験的に分かったからである。

昨今の若者の興味の幅が狭まっているとか、すぐに似た者同士だけで結びついて広がらないなどという話を聞くと、つくづくもったいないなあと思う。リアルの世界はインターネットよりも変化に富んでいる。YouTubeより近所のおっちゃんとの世間話が、人生のターニングポイントになったりするかもしれないよと、ちょっと本気で思ったりしている。

シンウ
児相さんのささやかな願い

私には 殺人事件の 予知も予見も できません。
親を罰することも 私の仕事では ありません。
貧困にあえぐ子どもに
お金をあげることすら できません。
残念ながら 私一人では
すべての子どもの 命を守ることなど 到底できません。
でも私には できることがあります。
最悪の結果に 至るきっかけになり得る
さまざまな家族の課題の 解決を支援すること。
親・子・家族を 応援し
寄り添うこと。
そして どうしても必要な時に
子どもを 安全な場所に 避難させること。
ただ その程度。

リクツ抜きで
愛おしみ
生活を支え
成長を促し
不条理を引き受け
損得を無視して付き合う。
そんな 「家族」の力に かなうはずなど ありません。
でも それでいいのです。
私はあくまで脇役。 主役は家族です。
主役を盛り立てるのが 私の役目。
私が大活躍する 世の中なんて なんだか気味が悪いでしょう？
だから私の夢は
「子どもの死亡事件ゼロ」 なんかではありません。
私の夢は すべての 子どもと 家族が 大切にされ
私が 必要とされなくなる。
そんな日が くることです。